

をゆるさんと思て、おのれはいみじき盗人かな、歌はよみてんやといへば、はかしくしからず候ども、よみ候なんと申ければ、さらばつかまつれといはれて、ほどもなくわなき聲にてうちいだす。

としをへてかしらの雪はつもれども、まもとみるに、ぞ身はひえにける、といひければ、いみじうあはれがりて、感じてゆるしけり、人はいかにもなさけはあるべし。

〔榮花物語^{音楽}七〕御堂^成寺^法供養治安二^〇二^〇年七月十四日と、さだめさせ給へれば、よろづをまづ心なうよるをひるにおぼしめしいとなませ給、池ほる翁の、あやしきかげのうつれるをみて、

くもりなきかゞみとみがく池のおもにうつれるかげのはづかしきかな、といふをき、て、かまらまろきおいぼうし。

かくばかりさやけてれる夏の日、にわがいたゞきの雪ぞきえせぬ、といふものをおもひまゐるにやとあはれなり。

〔古今著聞集^五和歌〕嘉應二年十月九日、道因法師人々をすゝめて、住吉社にて歌合しけるに、後徳大寺左大臣前大納言にておはしけるが、此歌をよみ給ふとて、社頭月といふことを、

ふりにける松物いはゞとひてましましむかしもかくや住の江の月、かくなんよみ給けるを、判者俊成卿ことに感じけり、よの人々もほめの、まゐりける程に、其比彼家領筑紫瀬高の庄の年貢つみたりける船攝津國に入んとまける時、悪風にあひて、既に入海せんとしける時、いづくよりか來りけん、翁一人出て、こぎなほして別事なかりけり、舟人あやしみ思ふ程に、おきなはいひけるは、松物いはゞの御句面白う候て、此邊にすみ侍る翁の參つると申せといひてうせにけり、住吉大明神の彼歌を感せさせ給ひて、御體をあらはし給ひけるにや、ふしぎにあらたなる事かな。